

## ハレー彗星ニュース発行顛末記

佐々木 稔\*

「ハレー彗星ニュース」とは……

いきなり「ハレー彗星ニュース」といっても、本月報の読者の中には何の事かと思う方も多いと思われる。この「ニュース」は、海上保安庁水路部が、天文に不慣れた、いわば一般の人々を対象にハレー彗星の位置に関する情報を記載して、1985年11月14日に第1号、11月25日に第2号を発行し、最終の第3号を1986年2月初旬に発行の予定となっているところのものである。

現在（1月中旬）、本格的なハレー彗星観望の時期の前に、まだ第3号も発行していないのに「顛末記」と称するのは、短期間のうちに、図らずも予想外の二万数千通もの送付希望が寄せられ、その数の多さに圧倒され、ドタバタ劇を演ずるところとなって、この発行作業を担当する一個人として、不謹慎ながら、もうこの辺でそろそろ静まってくれるのではないかと多少なりの願望の表われと言えないこともない。月報の貴重なページではあるが、編集担当の御要望によりこの小文で「ニュース」発行の経過を紹介させて頂くので、読者にはここで一服の上、筆者の脱線をお許し願えれば幸いである。

庁内むけのハレー情報は……

この「ハレー彗星ニュース」は、水路部で天体位置表などの編集を担当している航法測地課（旧編曆課）が庁内むけに毎月配っているミニ情報誌の付録としてハレー彗星の見え方の概要、海上保安庁の全11の管区における予想高度、方位と明るさの2時間毎値、赤経・赤緯値、星図上の経路予報図などを掲載して配布したもので、本来庁内限りのつもりであった。これが霞が関の海上保安庁（水路部は築地にある）の広報担当者の目に止まるところとなり、記者クラブの反応を探ったところ好評とかで、内容的には科学的な成果ということではなく記事にはならないと思うが、少くとも記者が彗星を見るのに良いので広報しておこうということになり、一部再編集して、海上保安庁水路部名で記者クラブへ、11月14日に送付したものであった。

軌道要素は、IHW (International Halley Watch) から入手したものをを用いていたが、水路部は観測をしていないので、この過程で東京天文台へこの「ニュース」をファックスで送付して、田鍋浩義先生から貴重な御指摘

\* 海上保安庁水路部 Minoru Sasaki: A Happening on the distribution of the Halley Comet News



今年の秋から来年の秋にかけて、ハレー彗星が地球に接近することは科学雑誌をはじめとして新聞、週刊誌などの紙面を埋めているのでなたも御存知のところでは。光学機械屋さんは天体望遠鏡、双眼鏡の売り込みに精を出し、旅行屋さんは南半球へのハレー彗星観望の旅を各種計画しているようです。

すでに60年1月と8月に彗星に関連して人工惑星「さきがけ」、「すいせい」が打ち上げられました。

ハレー彗星は76年を周期として太陽に接近する楕円軌道を描いて太陽を回っています。前回は、明治43年4、5月に観測されています。今年80才以上の人には記憶に残っている大事件の一つだったでしょう。この時は、彗星、太陽と地球の位置関係が良く、肉眼でも長く引いた尾が観望され当時の新聞に大きく扱われました。しかし、今回は、位置関係が悪く、彗星は太陽に最も接近して明るくなり長い尾を引きだす2月中旬の近日点通過の頃は、彗星は地球から見て太陽の向こう側において地球からは観測できません。地球に最も近づいたのは11月27日と来年の4月11日頃です。9月下旬に観測された結果では12等級位の明るさで予報よりやや暗く観測されているようです。

これからのハレー彗星の日本での観測はどうなるでしょうか。予報の概要は次のとおりです。

図1 「ハレー彗星ニュース」第1号

を頂いた。

記者クラブからはすぐにも反応があって、内容がよく判らないから説明に来てくれとのことで、霞が関へ向うこととなった。着くと3人の記者がいて、概ねいつもどおり、何で海上保安庁が天文の仕事をやっているのかの質問から始って、航海者が洋上で位置決定するには……、天測暦や天体位置表を刊行していて……、当庁に白浜、下里、美星の3天文観測所（名称は水路観測所）はあるがハレー彗星は観測していない……。ハレー彗星は、望遠鏡がないとまだ極めて見にくい……。この「ニュース」は庁内向けに作ったもので……。ようやく図表の見方、内容を説明する。「ところでこれは、海上保安庁に頼めば無料で送ってくれると書いていいんですね」と聞かれて当方は、ハタと困ってしまった。何せ、そこまでの決心はついていない。どうもこの3人の熱心さからすると、本当に記事になるかも知れない。答を留保して慌てて控え室に戻って広報担当も交えて「さあ困った」。議論百出、結論からいうと、今更資料を出しておいて引けない、水路部で一括引受けるしかないとなった。水路部の住所、返信用封筒に送り先を書き70円切手を貼ること及び電話による問い合わせには応じないことを書いて担当から記者クラブに配ってもらう。

水路部へ戻ってみると、既にNHKから「水路部がこのニュースを希望者に無料提供すると報道すると、電話、手紙が殺到しますが大丈夫ですね」と念を押していたが、留守部隊も今更イヤとも言えず「大丈夫で

す」と答えたとのこと。関係者が集って何通程度来るかなどと見積るが、「せいぜい1000通も申し込みがあるかどうか」という意見が多く、私のひょっとすると一万通に達するかもしれないなどというのは、苦労症とかで片付けられた。明日からのことが案じられたが、この日は未経験ゆえ、一同そのまま帰宅してしまった。

#### 課内外の電話が鳴り響いて……

次の朝、一抹の不安を感じながらも、まず朝刊を広げる。それらしいものはない。7時のニュース(NHK)を見たがこれも何事もなく、何やらほっとして、念のため8時のニュースを見ていると、何と御丁寧に我が「ハレー彗星ニュース」を拡大して見せて、海上保安庁水路部が、一般の人にもわかりやすいハレー彗星位置情報ニュースを発行した。海上保安庁水路部へ申し込みば送ってくれると言っている。我が方がそう言ってもよいと言ったのだから仕方がないが、いざそう言われてみると「ひょっとしてこれはえらいことになる！」。

早速水路部へ駆け付けると、9時の交換業務開始と共に、課内の電話が一斉に鳴り出した。「ハレー彗星ニュースはどうしたらもらえるか」というのがほとんどの電話の趣旨で、中には「どうして70円切手が必要か、60円のはずだ」などというのもあって、管理部門の課の広報担当も同様で、テンヤワロンヤとなった。大多数の人には寝耳に水で、各管区本部のみならず、下部組織の全国に65箇所ある保安部にも、相当数の問い合わせが行ったようであった。あとで聞いたところによると、前夜のうちに一部の民放テレビやラジオでも放送していたし、数種の全国紙の朝刊にも同様の報道が行われていたそうで、まず、「ハレー彗星ニュース」の存在と電話の対応方法を書いたメモを各電話毎に配布し、次に全管区本部水路部へ電話で事情説明すると共に、対応の仕方と「ニュース」の原稿をファックスで送った。そうこうするうちに、「ニュース」を受け取りに来る人が出始め、関係者が集って、青焼き、ゼロックスコピー等を作ると共に輪転機と印刷の手配、印刷原紙の作成、用紙の確保、それに10日毎に発行するつもりであったため、「ニュース」内に書かれた予報期間があと5日分しかなく、この分では何度も繰り返して発行しなければならなくなるという訳で、11月末までの分をまとめて第1号として発送すべく、内容の編集、作表、作図を開始した。午後には速達を含む発送依頼の郵便物が早くも届き始め、この日は当航法測地課だけで152件の電話問い合わせと21人の来訪者があった。

さらに驚いたことに、朝刊に載せなかったほとんどの全国紙と相当数の地方紙が夕刊か、次の日に、比較的大きく記事を掲載していたのであった。当課内では、天文

好きの若手1人しか彗星を見ておらず、この晩遅く私は水路部屋上にある口径30cmの反射鏡を使い、1時間ほどかかって、かすかに認められる彗星を見つけた。予報どおりの位置にあり安心した次第。

翌16日土曜日は、何人かが指定休日を自主的に取り止めて朝から編集、印刷を行っていたところ、1300通余りの郵便物が届き、会議室を確保して開封、読取り、折込み、封入、計数、発送を手分けして行った。一方、これだけ大量であれば、「ニュース」だけ返送するのはいらないとして、水路部の業務、発行している天体位置表、天測暦、北極星方位角表などの書誌の紹介と、水路部分に設置してある「海の相談室」のカラーパンフレットを入れることとし、その準備も行った。夕方、この日受け付けた分の発送を終って、次週月曜日からのことを思うと、ゾーッとした。

#### 何と日に5000通以上も来て……

月曜日、午前中に郵便物の大袋が3つ届く。あとでわかったことだが、この中に6000通ほどあったらしい。総員22人の課内で若刊の必要人員を残して、課長以下作業を行ったが、1300通ほどが発送できたのみで未発送分が山と残ってしまった。次の日に、4000通ほどが来るに及んでこれはもう当課だけでは対応できないと観念して、部内各課に2名ずつの応援を依頼するとともに、水路部の外郭団体である日本水路協会に、このためのアルバイト数人を雇って頂くようお願いした。

テレビのニュースを見て、葉書で申し込んできた人や切手不足の人があり、ある日刊紙では70円切手を「同封」の上申し込むとしたところもあり、返信用封筒がないと宛名書きがかなりの負担となってしまった。余分に切手を送ってくれる人もいて、私などはもらっておいて不足している人に回したらよからうなどといい加減なことを考えるのであるが、ここは海上保安庁のつかか水路部の、特にベテランの職員は実に対応が丁寧で、送付希望文をキチンと読んで、余分な切手は送り返し、不足分は補った。あとで考えると、これだけの混乱の中で比較的苦情も少なく、いわば好評だったのも、こうした対応のお陰であった。

また、いわば水路部の宣伝のためのパンフレットの挿入は、始めたもののこのための資料作りと折込みの人手がなくなり、やがて中断せざるを得なくなった。この頃になると、何でこんな事を無料で引受けたかという事で実費徴収の案も出たが、受け取る申し込み数に比べて発送量が追いつかず貯まる一方で、兎に角ここに至っては、今更、有料になど切換えられないとなる。

次の日も2000通以上きた。週末頃になると別の地方紙やミニコミ紙も記事を載せ、あるデパートは「ハレー

表1 「ハレー彗星ニュース」の統計

	電話問い合わせ	来訪	郵便発送
11月15～16日	193件	30人	1395通
18～22	100	78	16107
25～30	94	56	3889
12月2～7	37	34	1813
9～14	31	11	459
16～21	9	14	397
23～28	12	12	242
1月4～9	7	—	215
計	483件	235人	24514通

クリスマス」セール」の宣伝用にともらいに来る。ある小学校では、「先生が児童に、海上保安庁にみんな手紙を出すようにと言いましたので」と送付依頼状にあり、学校でコピーしてくれたらなどと思ったりする。あとでわかったことだが、現に多くの学校では、コピーを作って配ってくれたそうである。27日の彗星の地球への第1次最接近の日には、京都のラジオ局が昼下りの電話帳なる電話インタビュー番組で「ニュース」の紹介をしてほしいと言ってきた。これには、この「ニュース」の発案、計算、原稿作りをした、我が課の天文部門の“頭脳”であり“生き字引き”の井上(圭典)氏が出演して、熱弁をふるった。少しのちの事であるが、いろいろ取材を受け、「PENTHOUSE」誌からも来た時は、どの様に載せて頂くのか、少しドギマギした。この頃、第2号の送付を開始すると、ある日誌が「ニュース」の詳しい内容載せてくれたが、また送付依頼が増えないかと、そちらの方を心配するようになっていた。

#### お涙頂戴も……

それこそ山ほどある送付依頼、そして、それほどは多くない礼状の中から、ハレー彗星の周辺の話として、御紹介しよう。まず、宛先名。海場保安庁、会場保安庁、防衛庁や気象庁、冗談のつもりか陸上保安庁、そして水道部に水野部、水練部等々、かつて広報即知課という宛先をもらったが……。自分の宛名が不完全で返送されたものが30通ばかり、多いのは町または丁名忘れ、中にはゴム印で押してあっても帰って来たものもある。送付依頼には「彗星の運行時刻表をお送り下さい」、「結婚間もないのですが、夫がひとりでもオーストラリアに見にゆくと言っていますが、これで行かなくて済むようハレー彗星ニュースをお送り下さい」、「子供が天体望遠鏡を買いました。素人の親の自分には、全くわかりません。貴ニュース発行で希望がわき、申し込ませて頂きます。父」、「私は八十四歳です。明治四十三年二月、小学校生で二年生の三学期でした。その節連夜北の空から南の空へ長く伸びた彗星を眺めました。各おじいさん、お

表2 都道府県別郵便受付数  
(11月27日まで)

順位	受付数	人口比
1 東京	5548通	4.8通/1万人
2 神奈川	2605	3.7
3 千葉	1503	3.0
4 埼玉	1319	2.3
5 大阪	1149	1.4
6 兵庫	1104	2.1
7 北海道	799	1.4
8 静岡	547	1.6
9 長野	505	2.4
10 福島	384	1.9

以下、福岡、茨城、宮城から山口、熊本まで全都道府県から。計19909通。人口比は、順位15位の香川2.7、19位の奈良1.5、21位の宮崎1.3がその地方で特に多くほかは、概ね1.0以下。

ばあさん達は、毎夜彗星に向って何かモグモグ、グニャグニャおがんでいるのを見て居た記憶が御座居ます。……、「新聞でハレー彗星情報サービスの件見まして、ここのタイでは言葉の障害もあり、仲々情報が入手できなくて……タイ在住日本人」のほか、ニューヨークから1ドル札同封の申し込みや、アフリカの海外青年協力隊から、そして、両親がアフリカに行っていて、日本にいる子供が親に送りたいので、というのもあった。少し長文だが、「ぼくの家では、こんど天体ぼうえんきょうをかいました。ハレーすい星をみるためです。ぼくは小2、おにいちゃん小5、おねえちゃん中1、そしてお父さん、お母さん、じいちゃん、ばあちゃんてまいばん星をみています。はやくハレー彗星が見たいです。とっきゅうで、しんかんせんでおくって下さい。(郡山市)、「おにいちゃんと星をみるのが夢でした。けれどおにいちゃんはぜんそくの発作がひどくとおくへ入院してしまったのでいっしょに見られなくなりました。ぜひ、おにいちゃんの方にも予報図を送って下さい」などなど。返信用封筒の方に、旧百円札2枚が入っていたりする。送り返したが……。礼状は、お年寄か子供が多い。「昔見た彗星を一生に2度見るのが夢でした。82歳」、「家の宝とします」、「僕には、むずかしくてわかりませんが、父に読んでもらって教えてもらっています。この手紙は僕が知っているのを母が書いています。ニュースが届いた日の夜、父が僕にどこか彗星の見えるところへ泊りがけで出かけることを約束してくれました。次の号も楽しみにしています。ぼくがおじいさんになってもこの事は忘れないと思います。次にハレーすい星が見える時にきっとこの事を思い出すとおもいます。(小2)」、「とてもむずかしく、76年後は、もっとやさしく書いて」という御指摘もあった。中には、「ぼくは泳げませんが、海上保安庁へ勤められませんか」、「私は××女子大の4

年生で、こういう事が好きです。就職が決まらないのですが、そちらの職場では……」などもある。電話では、「今、うちの前の電柱を見ているのですが、どちらの方向に見えますか？」なども。

### やっとひと段落と思いきや……

ほぼ初めの10日間は連日上述のような騒ぎで、ほとんど仕事にならなかった。12月に入って発送数も日に200通程になり、ようやくひと段落と一同ほっとしていると、今度は、「某庁との所掌争いが結着して、いわばその仲直りに関係者を呼んで彗星を見せ、一杯やりたい……」、「予算取りにお世話になったのでお呼びしてそのあと……」、「組織、定員の獲得に世話になって……」。時は年末に向け忘年会シーズンでもあり、ものには名目が必要とか。日頃、霞が関に世話になっている立場もあり、この頃は、連日のように天文好きの若手職員に奮気をお願いした。こうした話が伝わると、さらにあちらこちらから観望の希望があり、庁内はもちろん、(運輸本)省内の幹部や水路部内の他の課にも、「ニュース」の件では支援を受けており、観望会も、ずいぶん開いた。我が若手職員は、連日寒空の中、銀座の灯の海の中にかすかに浮ぶハレー彗星を、熱心に、多くの人に順番に、視野のどこにあるかを説明する。気の弱い人は、途中で、はあ、見えましたと言って、望遠鏡から離れ、階段を降りて明るい所あたりで、首をかしげ、「あれ、見えたのかな」。暗い所に入って目が慣れるのにも時間がかかり、都心の灯りも相当で、空の状況によっても、見えた人と見えないらしい人の比が変わる。「今日は、2割しか見えないから悪い」、「半分の人が見えたから普通」、「8割も見えたから最高の部類だ」という具合である。新年に入って、三が日にも希望があったし、既に3月以降の朝方の分の“予約”も頂いている。日頃、海上保安庁が天文をやっているの? などと言われている身としては、我が仕事を理解頂く良いチャンスと心得て、御案内してゆきたいと思っている。

### 人のうわさも45日だったが……

この騒ぎも、新年に入って急に治ってきた。報道されてから、45日ほどになるが、免に角忙しかった。最も、この落ち着きは、「ニュース」の内容が1月10日までで、2月上旬発行予定の第3号の申し込みは、既に1000通程に達しており、もう一度あの騒ぎ、という心配もないではない。しかし、今度はもう見えるので、位置情報は不要との“希望”を持っている。本稿を終えるに当たって、最後に、1月13日付の朝日新聞の声の欄の松戸市の小山貴さん(教員、51歳)の投書をご本人と新聞社の許可を得て転載させて頂いて締めくくりとしたい。

ついにハレーすい星を探しあて、母に二度目の対面を味わわせることができた。

十二月二十八日、重いバッグに三脚と双眼鏡をつめこみ、妻と小学生の娘二人とともに故郷の長野市に帰省した。庭に三脚と双眼鏡をセットし、空が暗くなるのを待つ。六時、くろぐろとした山の上に輝く木星を目印にみずがめ座を視野にいれ、海上保安庁水路部の星座図を頼りに $\alpha$ 星の左に静かに動かしていく……あった! 淡く青白くぼーっと光っているのは確かにハレーすい星だ。

早速家族を呼び集めた。母の肩を抱くようにして顔を双眼鏡に近づけてやる。「ああ、これが……」。あとは声が出ない。そして双眼鏡から顔を離し、空に向かって手を合わせた。前回接近の時、母はまだ十四歳の少女だった。家の前の蔵の上に、大きく尾を引いた大すい星の姿はよほど印象的だったらしく、私の小さいころは何度も聞かされたものだ。

前回接近以後七十数年が流れ、その間教師として生き、戦争の苦しみを経て娘や夫の死に直面し、病弱だった私を育ててくれた母である。背中は丸くなり、背も少し小さくなった母の合掌する手には七十数年の月日が包みこまれている。七十六年後、娘たちが平安な地球上で子どもにハレーすい星を見せてもらってほしい。

## 雑 報

### NGC 5253 銀河に超新星 (1986 F)

オーストラリアの R. Evans は 1986年4月24.5日 UT に、NGC 5253 銀河の核から東へ10秒角、北へ20秒角の場所に光度13等級の超新星を発見した。

この NGC 5253 銀河には、過去に2個の超新星の出現が記録されている。まづ Z Cen と称されている超新星は 1895 年に出現し SN 1895 b と称され Fleming により発見され、極大光度は見かけの明るさ 8.0 等、絶対等級で -19.8 等のタイプ I 型であった。次に SN 1972 e と称されている超新星は 1972 年 5 月 13 日にアメリカのコワルによって 8.5 等級で発見されている。極大光度は実視等級で 8.4 等、絶対等級で -19.4 等で、これもタイプ I の超新星であった。

今回の 1986 F 超新星は、これらに続く3個目の出現ということになる。

1984 年 12 月に発表されたパーボン達の改訂版超新星のカタログ (Astron. Astrophys. Suppl. 58, 735, (1984)) によると3個以上の出現は8個の銀河で、最も多いのは NGC 6946 の6個である。このカタログには 1885 年から 1983 年の終りまでに発見されたもの 568 個が収められている。発見時の光度は 15~17 等であるが、NGC 5253 に出現した2個の超新星は、見かけの光度が大変明るかったことから、強く印象づけられている。